

# 奄美群島・喜界島と文化メディエーター

—— 文化メディア学的視点から ——

加 藤 晴 明  
寺 岡 伸 悟

## 1 研究の視点について

奄美群島は、民俗学研究にとって貴重な文化資源の横たわる宝庫である。しかし、本土・鹿児島と沖縄の間であって、日本の過疎地の多くがそうであるような高齢化と急激な人口減少という極めて現代的な課題に直面している島である。

そうした現代社会の課題と古くから続く民俗文化の両面を抱える奄美群島に対して、筆者らはメディアと文化という視点からの接近を試みてきた(加藤・寺岡 2010, 2012a, 2012b)。メディアとは、広い意味で文化を媒介するものとして捉えることができる。媒介とは、「文化の伝承」であり、「文化の創生」であり、また「情報発信」でもあるといえよう。

従来、文化の伝承研究の研究においては、民俗文化(伝統文化)に焦点をあて、その発掘や系譜関係の分析等が中心となってきた。一方、情報発信の研究においては、「地域情報化」としてのインターネット利用の可能性や既存のマスメディアの「地域密着化」などに焦点を当てた事例研究が中心となってきた。

これに対して筆者らの研究では以下の2つの方法的な立場から調査を行

うことで、上記2つのアプローチの架橋を模索してきた。すでに繰り返し示してきたが、本稿の分析にあたりあらためて簡潔に記しておきたい。

方法論1：1つの地域の全メディアを俯瞰する。

地域メディアは「地域のローカルアイデンティティの語り部だ」という視点から、メディアのカテゴリーそのものの裾野を広く捉える試みの必要性の強調である。その目的は、従来の地域メディア研究が、業種別の地域メディア群に空間などを加えた縦割り型の類型学であるのに対して、地域のなかに積層する全メディアの総過程を解読するという視点の重要性を指摘することにあった。

そうした「地域におけるエージェントの全域が、地域メディアの全域である」という定義をもとに、筆者らは、地域の中にどのようなメディアが存在し、それがどのように相互関連し、その地域の人びとや、人びとの背景にある文化と関係しているのかを主題化してきた。そして、以下のような視座を開発してきた<sup>1</sup>。

地域メディアの垂直構造：ひとつの地域内でメディアが積層している構造

表出の螺旋：メディアが相互に関係しながら情報を発信していく様態

地域メディアの総過程：情報の流域を過程論的に捉えていく観点

地域メディアの生成・持続過程：ある人物（組織）が地域メディアプロジェクトを開始し、持続する過程

方法論2：文化の担い手としての文化メディエーターに着目する。

文化を担う「人」、つまり文化の伝承者や文化の創発者、語り人に着目する視点も重要である。奄美は「古代からの文化が根づく島」といわれる。しかし、そうした民俗文化は、もうかつてのシマ（集落）に準拠した文化のままではありえない。シマに準拠した民俗文化（あるいは社会学的には生活文化といってもよい）は、標準化・グローバル化の急激な侵略へ

の適応として、現代的な転換をとげざるをえないのである。そうした転換は、文化変容として捉えられている。

この文化変容は、単なる自然発生的な出来事の連鎖ではなく、多くの場合、危機意識を抱いて意図的に時代の変化に対峙しようとする、あるミッションをもった人びとによって担われていることが多い。われわれは、そうしたミッションをもって文化変容の担い手となっている人びとを、文化メディエーターと名づけた。メディエーションとは、文化メディエーターによる情報伝播の媒介実践プロセスであり、「伝承・創生」の現代的なプロセスである。文化メディエーターには、個人だけでなく組織エージェントも含まれる。こうした考え方は文化伝承という概念を再考することになる。すなわち文化は、イノベーション（変容と革新）されるものであり、苗床にある文化（民俗文化の古層）が、今日の変容をとげるプロセスそのものとみることができる。

## 2 喜界島と文化メディアプロジェクト

鹿児島県喜界島は、奄美大島の東隣に位置する隆起珊瑚によって造形された周囲 48 キロメートルの小さな島である。鹿児島からは 380 キロメートル離れている。地理的には奄美群島がそうであるように、太平洋と東シナ海がぶつかる北緯 28 度 19 分、東経 130 度 00 分に位置する。隆起珊瑚の島であるため山といえる山はなく、最高地点で 211.96 メートル。現在も年間 2 ミリずつ隆起が続いている。

島の 40% が耕地面積であり、近年では地下ダムによる灌漑施設の整備に支えられており、サトウキビのモノカルチャー農業によって特長づけられている。サトウキビ以外に、白ごま、ソラマメなどの農産物や、加工品にも力をいれている。

人口は約 8500 人が 37 の集落に分かれて住み、それぞれ独自性のある唄・踊り・言葉を有している。お盆の伝統芸能である 8 月踊りも、集落により

異なる。学校で教える 8 月踊りは集落がもちまわり交代で教えるため、毎年異なるという。

島は、大きくは奄美大島に面した西側と太平洋に面した東側に分かれる。明治 19 年には、西側の湾集落を中心とした村と東側の早町を中心とした村に二分された。その後明治 41 年の島嶼町村制の施行により二村が合併し喜界村となったが、大正 8 年に、湾集落に役場をおく喜界村と、早町に



写真 1

サトウキビ畑 隆起珊瑚の島なのでミクロの大陸のような景観が広がる。



写真 2

乾燥中の白ごまが島内の至る所に見られる



写真 3

日本復帰を祝った記念碑 (2013 年は、復帰 60 年にあたる)



写真 4

島で一番大きなガジュマルの樹

役場をおく早町村とに分かれた。その後、昭和16年に喜界村は喜界町になる。戦後の米軍統治を経て、昭和28年に本土に復帰した後は、昭和31年に二つの町村が喜界町として合併し、一島一町の島となっている。

島外との交通は、空と海の便がある。空港は他の離島同様、地方管理空港、つまり地方自治体が管理する空港である。空の便は、鹿児島直行便（2便）と奄美便（3便）がある。船は、鹿児島発のフェリーが毎日1便。奄美大島名瀬行きフェリーが週3便である。奄美群島では、東京・大阪・福岡という奄美群島以外への直行便を有しているのは奄美空港（奄美大島）だけである。東京や大阪への移動は、鹿児島乗り換えということになる。

喜界島に対する筆者らの関心は、広義の地域メディアと文化メディエーターの存在にあるが、喜界島には、地域メディアとして最初に列挙されることの多い既存のマスメディア型メディア産業が存在しない。新聞は、奄美大島で発刊されている2紙（南海日日新聞と奄美新聞）を購読する。ケーブルテレビはない。ラジオは、奄美市のコミュニティFM「あまみエフエム」を聴取することができる。平坦な島の地形から、奄美市の電波を感度よく受信することができるからである。

マスメディア型地域メディア以外には、本稿の観点からみて重要な活動をおこなってきた文化メディエーターが多数存在する。インターネットラジオ「喜界島ラジオ」、ライブハウス「SABANI」、そして、島唄大会で数々の受賞者を輩出したY民謡教室等である<sup>2</sup>。

本稿はこれら喜界島の文化メディエーターについての調査（主としてインタビューと観察による）の知見を、調査の中間報告として整理し記述するものである。

分析枠組みとしては、すでに図1のような視座が提出されている（加藤・寺岡2012など）<sup>3</sup>。しかし今回は、中間報告という意味合いにかんがみ、図1から以下の3つの観点を取り出し、それに依って知見を再構成した。

視点1：実践内容：どんな内容の文化媒介実践をしたのか。（図1の「資源の動員」「成果の蓄積」「持続の課題」など）

大項目 単位としての事業	中項目 事業への4視点	小項目 4視点の詳細
ある人物（組織） が地域メディアプロ ジェクトを開始 し、持続する。	(ア) 動機・目的・ミッション (使命)	a. 背景
		b. 転機
	(イ) 資源の動員	a. 地域内部からの動員
		b. 地域外からの動員
	(ウ) 成果の蓄積	a. 内部蓄積
		b. 外部蓄積・・・流出
	(エ) 持続の課題	a. ディレンマとの遭遇
		b. ディレンマの克服

図1：文化メディアプロジェクト（地域関連）の生成・維持過程

視点2：担い手のキャリア（図1の「動機」つまり、背景と転機）

視点3：担い手の考え方（姿勢・思想・ミッション）（図1の「目的」  
や「ミッション」）

本稿では、視点1から視点3までを順序立てて論じるとともに、時に、  
視点を戻しながら、その文化メディエーターとしての像を立体的に描  
くことを試みたい。

### 3 文化メディアプロジェクトの試み

#### (1) 島に島唄をひろめたY民謡教室

##### 視点1：実践内容

奄美大島では、「喜界島は島唄が盛んである」旨の発言が聞かれること  
も少なくない。それはひとえに、Y民謡教室（活動団体の名称は「奄美  
芸能島唄研究会」とその弟子らの活躍が奄美大島で広く知られているこ  
とに起因する。教室の卒業生は、すでに1000人を超える。人口8000人  
（現在）の島で、50年余りにわたって島唄伝承に文字通り心血を注いでき  
た教室、それがY民謡教室である。喜界島だけでなく、徳之島でも複数の  
教室を開設していた時期もある（2002年から数年間）。奄美民謡大賞の  
牧岡奈美氏（23回大会、2002年）と川畑さおり氏（30回大会、2009年）、

さらに民謡民舞少年少女全国大会優勝の澤愛香氏（徳之島教室，2004年）らを輩出している。

すでに創設者のY氏は健康上の理由から一線を退き，現在は，Y夫人が運営の要となり，お弟子さんらによって運営されている。

その教室の様子は，これまでも数々の雑誌や新聞などで紹介されてきた。JALグループ機内誌『SKYWARD』2011年3月号はその教室の様子を次のように描写している。

「パイプ椅子に腰掛けた足が，つま先しか床に着かないような小学生でも，三線の腕前は並じゃない。誰ひとり音を外さず，課題曲を全員で演奏する。それは圧巻の光景だった」（48頁）

Y教室では，2007年（Y氏80歳）には，教室の開設40年を記念して「奄美芸能まつり」を開催している。その模様は地元新聞「南海日日新聞」でも大きく報道された。

Y教室はまさに文化メディエーターである。極端な言い方をすれば，もしY教室がなかったなら，喜界島にこれほど島唄の習いごととは定着しなかったであろうし，卓抜な唄者も輩出されなかったかもしれない。

島唄教室のなかでも，Y教室がなぜそのような華々しい活躍をしたのか。つまり，なぜ文化メディエーターとして成功したのだろうか。

われわれのインタビューから浮かびあがるY教室の文化媒介のスタイルは，正統的周辺参加（LPP）論で展開される学習に近い。そうした共同学習，共同実践的な身体文化の伝承スタイルがとられている。

Y夫人は，「教えるというよりも，聞いて，見て，覚えるというのがYのやり方」だという。

「みんなで輪になって，先輩達が先にうたったら，後輩達が唄う。ついできなさいというやり方」なのだという。歌詞はあるが，楽譜に対しては否定的な考え方だ。「楽譜に頼ると固定するので，自分なりの唄をちゃんと唄わせるには，聞き覚えで唄うようにしている」と，練習によって自然に習得していく方法をとっている。

「咲いた咲いた」程度が弾ければ、あとは「勝手についてきなさい」。みんなが一緒に弾きながら、上手な子をみながら一緒に勉強していく。「教えるというよりも、みんなで一緒に勉強しよう」という伝承のスタイルなのだという。低学年の子には、高学年の子が教え、そして互いに切磋していく。「いっしょにがんばろう」という気持ちが涙ぐましいという（Y夫人談）。

と同時に、Y夫人が心がけたのは、行儀やしつけの場としての教室であった。行儀がよくないと厳しく叱ったという。「遊びでやっているんじゃないんだ」ということを子どもたちに諭し、親たちの期待にも応えていく。そうした行儀作法・躰の場として運営することで、教室では意欲的な雰囲気が出た。その一方で、年2回、正月と夏は、教室生の集いをやって子ども達をもてなしてきた。

ただ、それでも、なぜY教室が類い希な文化メディアーターとなったのかという疑問は残る。Y氏自身は、かつて地元雑誌のインタビューに答えて、島唄大会が近づけば、仕事が遅くなったら、もうご飯も食べずに教室に走ったこと。また子どもたちに教える時でも、中高生には、唄の意味をわきまえないと上手に唄えないこと、意味や歌詞の説明を徹底してやったことなどを語っている。（奄美の月刊情報誌『Horizon』第10号、1999年12月発行）

## 視点2：担い手のキャリア

Y氏は、唄好きの両親の下で育ち、若いころは歌手をめざしたこともある。

1927年 徳之島伊仙町に生まれる

1965年 喜界島に農機具販売の仕事の都合で喜界島に移住。その後、鉄工所を始める。

1968年 民謡教室を開始（2013年で46年目）

2002年 徳之島でも教室を開設 06年から徳之島伊仙町に帰郷

病気のため指導の一線から離れる。教室は、2007年ごろ孫のYHさんが指導を引き継ぐが後に転出。現在Y夫人と弟子を中心に教室を運営している。

### 視点3：担い手の考え方

Y氏やその夫人は、いかなるミッションをもって教室を運営してきたのだろうか。

Y氏は、喜界島に移住した当初は、最初は民謡教室をやるとは思っていなかった。すでに指摘したように、それが、唄好きな夫人達に教えだし、幼かった自分の娘さんに教えているうちに、その友だちへと習いたい子どもが増えていったという。島の文化を受け継いでいくためにも子どもたちに伝承していききたいという強い意志、さらには、本島の子どもたちに負けないようにという意思が、Y夫妻の意思でもあるのだと思われる。

奄美大島からみれば離島に位置する喜界島で、たった1人（2人で）孤軍奮闘してきた。そこには、やはり大会で受賞することへの強い意思が読み取れる。教室運営では、木曜日・金曜日は一般の教室を開くが、水曜日は、大会用の教室を開いている。一般教室のなかに上手な生徒がいれば、「特訓しますからやりませんか」と親と話し合うという。これは、Y教室だけではなく、各教室に言えることだが、島唄の大会が、文化の伝承を支えてきたのは事実だと想像される。大会という競合する舞台があるから熱心に研鑽する。夫人が何度か口にした「がんばる」という言葉からは、そうした大会への強い思いが感じられる。

夫人は、「場慣れ」の大切さもよく知っている。「場所」「舞台」を経験させること。そのために、喜界島の集落の盆踊りや病院や福祉施設などと交渉してそうした舞台を子どもたちに用意している。また教室生の集いも企画し、手作りでもてなしてきている。子どもたちには、「賞をとったお姉ちゃんたちのように唄いなさいよ」と教え、唄をちゃんと唄っていく姿勢と心構えを諭すのだという。

また、教室の卒業生が、大会で受賞すると空港から賞状や盾をもって直接かけつけるのが何よりも嬉しいと語る。そこには、本島の教室生へのライバル意識も垣間見える。

Y 夫人と話しをしていて、伝承される島唄とは何か？という問いが生まれてくる。それはY 夫妻に投げかけられた問いでもあるようだ。

Y 氏自身が、「なぜ喜界島の島唄を教えないのか」とよく言われたという。Y 氏の島唄は、徳之島出身ということもあり、言葉が混ざっていると評されることがある。喜界島の言葉でもなく、徳之島のそれでもないということの意味すると思われる。Y 氏は、武下和平氏の島唄を聴いて勉強したという。つまり、Y 教室でうたわれる唄は奄美大島本島（特に本島南部のひぎゃ唄）のそれが多いということになる。

Y 氏と武下氏との間には、特別の師弟関係はない。こうした事例には、民俗文化がメディアを通して伝承される様がよく示されている。極端な言い方をすれば、喜界島の島唄文化、そしてその文化資源は、レコードやカセットテープというメディアであり、また現在はY 氏の島唄のCD でもある。そして大会というメディアイベントが、その熱意の源泉ともなっている。まさに、文化の伝承は創生を含み、それはメディア媒介的な過程として営まれるのである。Y 教室 50 年の営みは、文化の伝承・創生が、メディアーターとメディアによって展開された典型的な事例といえるのではないだろうか。

## (2) 集落に残る民俗文化・島唄を伝承する | 教室

ここまで見たように、Y 教室は、ある意味では混合的な「奄美の島唄」の創出・伝播者だといえるであろう。それは、集落に根ざしたシマの唄ではなく、また「かさん唄」（北部）「ひぎゃ唄」（南部）として分類される奄美の「島唄」ではなく、集落に根ざした「シマ」の唄とレコードを媒介とした標準化された島唄とのハイブリッドだからである。それはまさしく創生された島歌とも表現できる。Y 氏は、類い希な熱意と教育システム

で、島唄の演者を多数生み出してきた。

同じ喜界島にあって、その対極の位置で、文化を伝承・創生しようとするのが、I氏である。それは、20年に及ぶ集落（シマ）に根ざしたシマの文化の伝承・創生の試みである。

#### 視点1：実践内容

I氏は上嘉鉄の集落で、集落に伝わる芸能（8月踊り・島唄）の伝承に努めている。

その代表が、「(上嘉鉄)8月踊り保存会」(月1回)である。そして8月踊りに加えて、むしろ集落の唄をうたえる唄者が減ってきていることを不安に感じたことから、島唄の保存活動も開始した(2002年)。唄者は当時20名位いたという。最高齢は80歳代であった。まず、地元の8月踊りでうたわれる唄の歌詞を文字化し、練習用のテープをつくって、練習したという。

その後、子ども達を中心に三線を教える「上嘉鉄民芸保存会 三線クラブ」(週1回・年1000円)もひらき、いまは小学校区の子どもたちを中心に教えている。

「上嘉鉄の8月踊りの保存会」では、名瀬、沖縄、東京、関西、鹿児島  
の郷友会(集落郷友会、喜界島郷友会)へ出かけて行つての交流も行つてきた。旅行会社に勤めていることもあるが、高齢者を連れて、郷友会での8月踊り交流は大変歓迎されたという。地元の8月踊りでは、女性が踊り、男性は酒を飲みながら眺めていることが多いが、「(名瀬の)郷友会に行つたら、みんなが立って、みんなが踊りの輪に入って踊って、涙流して喜んでくれて、終わって2次会・・・」そんな熱狂的な歓迎になったという。

興味深いのは、8月踊りと島唄の文化の違いについてのI氏の解釈である。氏によれば、8月踊りは「みんな融合する」のに対して、島唄は、「あの人の三味線にはこの人の唄、あの人の唄にはこの人の三味線」といったように、「個性と個性のぶつかりあい」、「(袂を)分かちあうような、逆

の個性」なのだという。

島唄の三線クラブでは、熟年や定年後の高齢者の多い講座（島外から来た女性も多い。赴任中に島の文化を習得して帰るというケースである。内地では、これに島唄興味の若者が加わる）が一般的であるが、他方で、子どもたちが熱心に習うような教室の場合には、大人が来なくなって子ども中心ということが多い。習熟の早い子どもに気圧されて、大人が来なくなるのだという。筆者らの調査では、Y教室も、笠利の教室も子どもの習いごと教室といってよいと思われる。

島唄教室を開く経緯はこうである。ある日、鹿児島から転校してきた小学校2年生の駐在員の娘さんが、「おばあちゃんから、島唄習っといで」と言われたとあって、習いに来た。次の週は、I氏の娘さんも含めて友だちを連れてくるようになり、やがて20人ほどの教室ができあがっていった。大人の参加者は、島に駐屯する自衛隊の家族など基本は島外の人であった。教室も最初は大人が多かったが、「大人は用事があると来れなくなり、1~2週休みと来れなくなる」という。いまは子どもばかりである。間違っても弾く子どもの方がどうしても上達するのだという。

教室は、財団から補助もあり三味線や太鼓の数が5丁づつそろえることができた。月一回は、8月踊りと一緒に練習し、発表の場も盆踊りなどの地域の行事である。

I氏のもうひとつの文化媒介プロジェクトに、ミニコミ誌の発行がある。16年ぶりに島に帰ってきた氏は、島の情報が全部受け身になっているという危機感から、地元からの情報発信のために3~4人の仲間とともに「わきゃ島通信」を発行した。B4版、ガリ版刷りを月に1回1500部ほど発行し、新聞の折り込みとして配布していたという。都会に住む息子や孫にも送りたいという要望もあり、島外の島出身者にも送っていた。

小さな島でのそうした活動から、当然I氏は島で注目される存在となっていき、青年団のない町であるため青年活動のリーダー的存在としても活躍することになった。例えば、「サマー・フェスタ・イン・すぎら 2007」



写真 5

Ⅰ氏が活動の拠点としている地区センター



写真 6

島唄クラブの風景（2012. 9. 7）

などの自由参加型の若者の音楽イベントを企画している。また、喜界島文化協会の事務局長も経験している。

こうして氏の生活全体が忙しくなるなか、氏は、逆に集落という足下のことをしなければダメだと思えるようになったという。「足下から」は、氏が繰り返し語るフレーズでもある。そこで始めたのが集落（上嘉



写真 7

島唄クラブの風景（2012. 9. 7）

鉄）の新聞づくりである。集落の中の身近な話題を中心にした新聞だ。Ⅰ氏が記事を集め、地元校の教師が編集・印刷し、120 数号まで出したという。氏がいま取り組んでいるのは、集落の財産管理、つまり共有地管理である。これは実際には、土木作業的な活動が大半を占めるといふ。

Ⅰ氏は、喜界島のなかでも出色の存在であると言えよう。キャリアとしても高い学歴と知的な文化資本をもつ。同時に、喜界島のなかでも特異ともいわれる古い文化を残す集落の出身者である。氏は、喜界島という領域での活動から、逆に集落に準拠した、シマの民俗文化（民俗芸能）の発掘者・伝承者・媒介者へと歩んできた。いずれにしても、氏の活動は、奄美のなかで、生活世界に準拠した文化メディエーターの突出したモデル

ともいえるのではないであろうか<sup>4</sup>。

## 視点2：担い手のキャリア

I氏は、1960年生まれ、中学の途中から鹿児島に転校し、高校まで鹿児島。その後、東京の私立大学で中国語を専攻。日本語学や方言学を学んでいる。台湾に大学院留学、台湾でビジネス生活を送る。28歳の台湾時代に同じ集落出身の女性と結婚。永住するつもりであった台湾から、1992年32歳で帰郷。その翌年の1993年4月から、月1回の8月踊り保存会をたちあげている。

氏は、台湾時代に、1日24時間のうち4時間くらいは島の言葉を使いたいという思いから、出身集落の実家の近くから妻を迎えている。家庭内では島口（方言）を使うという。

I氏の島唄や三味線の習得は、島に帰ってきてからである。Y教室にもいたことがある。

I氏の転機はどこにあったのであろうか。I氏自身はその転機について語っている。

氏は、大学卒業後に多言語社会である台湾に魅了され、台湾での生活を始める。そうした多言語社会の中で、氏は自らの文化の重要性、それを知ることの重要性に気づいたという。

「伝えるものないんですね。僕は。(他の)楽器はできても、こんなの(三線)できない。日本の文化を語れと言われても…」

台湾には沖縄の留学生が沢山して、高校卒業した子が、三線して、鳩笛吹いて、沖縄の言葉で語る。八重山芸能などもできる。「なんでこいつら若いのに(こんなことができるんだ)」。

こうした体験をきっかけに、実家にあった父親の三線を那覇で張り替え、帰省の度に、近くのおじさん・おばさんに手ほどきしてもらうようになった。しかし、本格的に習い始めたのは、32歳で日本(喜界島)に帰ってからである。

やがて子どもが生まれ、家では島口を使いながら、氏は自ら子どもに伝える文化についてさらに自問したという。

「家では子どもは島の言葉を使っていた。でも、島の言葉くらいしか伝えられないんです。私自身も深みがない。」

自らも島の文化を探求したいとともに、子どもに島の文化を伝えたい。それが帰郷の大きな理由となった。

### 視点3：担い手の考え方

20年余りにわたり、8月踊り、島唄、ミニコミ誌の発行、財産区の保全など、島、そして集落に根ざした文化の伝承・創生の活動を、文字通り“産み出していく”氏の、行動の原点・起動因はどこにあるのであろうか。

氏は、島唄クラブの保護者に自らの考え方を語ったという。

「私がやろうとしているのは、地元の上嘉鉄の唄を伝えることです。でもこれは（Y教室と違って）大会では通用しない唄です。島唄で有名になって・・・は期待しないでください。周りからも我流ですね、と言われますよ。」あえて彼は「泥臭い、上嘉鉄のなかで唄われている」島唄の伝承を目指しているのである。

島唄クラブの会費は年1000円であり、一般的な習い事教室とは対照的であろう。氏は、「あんまりお金を掛けたくない」といい、遠征などは望まず、地元の集落の行事への参加を重視している。

みんなで唄い踊る8月踊りの魅力を語る時に氏の言葉には力が入る。「島唄は、個人、個人の技巧を競い合うもの」という。それに対して、8月踊りは、普段は政争していて寄り合うことのない人びとが寄り合えるような力、「世間のしがらみを超える」力があることが魅力なのだという。

氏の故郷への思いの原点のひとつは、中学の時に鹿児島島の転校先で体験した、島差別にあるようにも思われる。親は「方言札で恥をかかされた時代」で、「自分の文化に誇りをもてない世代」であった。その世代では、大和（やまと）志向が強く、都会で成功することが親孝行という価値観が

普通であるという。そうした世代の親をもつ氏は、中学2年の3学期に鹿児島県の中学に転校した、そこでは、生徒によるイジメ（島差別）に加えて、教師たちの強い鹿児島弁が使われていた。共通語で本を読むと笑われ、放課後には上級生に呼び出された殴られる始末。鹿児島弁を使う担当が、氏の親が自宅にお使い物をもって尋ねると、標準語で話しをする。

東京では逆に、同窓の鹿児島人の友だちが、鹿児島弁を使うといやがり、「鹿児島弁やめようぜ」と言う。鹿児島県人のもつ、都会では鹿児島弁を避け、奄美では鹿児島弁で威張る背理の感覚。

氏が、鹿児島とは無縁の多言語を受容する台湾社会に行き、さらに鹿児島とは異なる奄美という文化にこだわる背景には、そうした差別の体験があるように思われる。

1氏自らは語らないが、集落の唄・踊りの伝承、生活世界の再発見をめざしたミニコミ誌での語りには、鹿児島、標準化された世界ではなく、語るべきもの、自慢すべきもの、自己のアイデンティティとしての自文化へのこだわりがあると思われる。それは、すでに「大会化」し、ある意味での標準化が進む「奄美の島唄」のスケールでは評価されない世界である。そのことに氏は自覚的であり、それゆえに、島唄を習う子どもたちの保護者にもその説明をしたのであろう。

島唄が集落に根ざしたシマジマの唄としてある世界、シマの民俗芸能を、シマの生活者の立場から、そのまま伝えること、そのままの形で発信していくこと、それが氏の立ち位置であろう。それはある意味で、最も手間の掛かる、そして、時には外部評価の少ない試みである。そうした伝承者は、各シマにもいる。しかし、卓抜した知的資質をもち、自覚的にその立ち位置を選び、自ら課したミッションにこれほど真摯に向かい合う文化メディアエーターは少ないようにも思われる。

### (3) ラジオ喜界島を主宰する M 氏

筆者らが喜界島のメディアに注目したきっかけは、「ラジオ喜界島」と

いうネットラジオの存在によってである。南の島に、島固有の島唄を配信しているラジオの充実したサイトがある。趣味のラジオサイトはいくらでもあるが、島に根ざしたそうした試みは、極めて希少な事例であろう。そのラジオは、島のサトウキビ農園を営む M 氏によって運営されている。JAL グループ機内誌『SKYWARD』2011 年 3 月号は、ラジオ喜界島を、「島唄専門 ラジオ喜界島」として大きな特集を組んで紹介している。

### 視点 1：実践内容

インターネットラジオ「ラジオ喜界島」の主宰。

11 年前（2002 年）から、自宅のパソコンを駆使して、スポンサーなしで「道楽と使命として」インターネットラジオを配信している。

「島を離れて暮らしている人たちに島唄を聴かせたい。島唄に馴染みのない人にも聴いてもらいたい。喜界島のよさを広く知ってもらいたい。そんな思いで始めました。今では海外からもアクセスがあるんですよ。」（『SKYWORD』2011.3.44 頁）

島に昔あった親子ラジオ（有線放送によるラジオ）のイメージがあり、ラジオという発想が自然に生まれたのだという。

音源は、後述する古くから島に伝わる島唄を録音しているグループの音源や、自分で収集した音源などを用いている。ノートブックパソコンに直接録音するという。



図 2：ラジオ喜界島のロゴマーク  
懐かしい音の世界を連想させる。

### 視点 2：担い手のキャリア

パソコンを駆使するという世代の常識からすれば、比較的年齢の高いともいえる M 氏が、どのようないきさつでパソコンと接点をもったのだろうか。

M氏は、1949年(昭和24年)に奄美大島に生まれた。いわゆる団塊の世代である。奄美大島北部の屋仁集落で生まれ、父親が警察官であったことから、与論島、沖永良部島、徳之島と、奄美群島を転転としながら育っている。大島高校を経て、東京農業大学に進む。植物病理を学び、生物の先生になりたかったという。農業が好きというよりも、生物が好きだったという。

東京農大と喜界島とが縁があり、28歳に喜界島に移り農業を営んできた。東京農大出身の農家は、喜界島にも十数軒あるという。

M氏は、アップル社のMacパソコンを使っている。娘さんの受験勉強の教材づくりのために、操作の楽なMacパソコンを購入したのが始まりである。最初は、自分の農園(サトウキビの加工商品を販売している)の宣伝用のホームページづくりから始まった。Macの記念碑的なパソコンであるクラシック2からスタートして、いまではノートパソコンやデスクトップパソコンを駆使している。

パソコンの習得、そしてネット環境の改善(ADSLの普及)が、かつて聴いていた親子ラジオの現代的な展開としてのインターネットラジオ配信という実践へと結びついている。

島でインターネットを使って物産を行うサイトは沢山あるが、その傍ら、その手法を島の文化を発信するため

に使う人は少ない。氏は、中学の時に、オープンテープでのテープレコーダーをもっていたという。50代でパソコンを習得するということからしても、M氏の情報機器に対するリテラシーはかなり高いと思われる。ただ、それでも、そのリテラシー自体は今日では珍しいことではない。その情報リテラシーを、島唄文化の

1ch	島唄放送
2ch	島唄今昔
3ch	喜界島だより
4ch	講演・祭事・インタビュー
5ch	今、「キカイジマ」が面白い
6ch	道の島 航海記
7ch	喜界島の楽しみ方
8ch	喜界島の生き物たち
9ch	リンクページ

図3：ラジオ喜界島の番組表

2chは、奄美島唄の研究者でもある、片倉輝男氏のページである。

発信へと結びつけて実践しているところに、ミッションがあるといえるのかもしれない。

### 視点3：担い手の考え方

M氏も、シマ（それぞれの集落の）の方言や踊りが消滅してしまうことへの危機感を強くもっている。

「あと20年くらいしたら、（言葉の）生はもうないんですよ。」

こうした語りからは、島に普通に存在した音文化、その消滅への危機感がにじみ出ている。これは、島の言葉や唄を、生活のなかで自然に駆使していた世代と、郷土文化教育のなかで、島の言葉や踊り・唄を教えられた子ども世代との間にあって、標準化を余儀なくされた世代だからこそ抱く危機感なのかもしれない。

#### （4）郷土研究会の活動と民俗文化のアーカイブを実践するK氏

最近、「アーカイブス」が注目されつつある。作品や史料の保管・公開という意味で注目されることが多い。ただ、文化を記録に残す原点ともいえる文化メディエーションのプロジェクトは、記録メディア機器が登場して以来、NHKのようなメディア産業だけでなく、市井の有志によっても試みられてきた。

奄美では、テープレコーダーをかついでシマジマの名人唄者の声を録音し続けた山田米三氏（ニューグランド店主）の、島唄文化の収集が有名である。

日本では、「民族文化映像研究所」を創設した姫田忠義氏が知られている。姫田は、民俗学者の宮本常一に師事し、1961年から仕事の傍ら民俗文化（姫田の言葉では民族文化）の記録を撮り続けた。それは、1976年に「民族文化研究所」を設立し、その所長を長く務めた。姫田のこうした活動は、映像人類学のフロンティアと位置づけられている。

1980年に発行した『日本民族文化映像研究所の歩み』の巻頭で、姫田

は、文化の記録について次のように位置づけている。

「民族の文化は、それを生み出した民族の心と生活行為の凝集したものです。そしてそれは、人類文化という巨大な水脈のひとつひとつの支流としてあります。」

「まず自分の足もとである日本列島における民族文化の基礎を、映像によって記録することです。」

また『忘れられた日本の文化』(1991)では、基層文化について次のように定義する。

「激動する世のなかで、しかもなお脈々と底流するものを見つめつづける。その脈々と底流するものを、私たちは基層文化と呼ぶ。」(9頁)

姫田は、奄美についての記録も残している。映像民俗学シリーズ『日本の姿』第6期5巻「奄美・南のしまの祈りと行事」である。

こうした映像を使って文化の記録を残す姫田の文化媒介活動に対して、喜界島に準拠し、喜界島の民俗文化を記録に残す活動を続けているのがK氏である。

#### 視点1：実践内容

K氏は、Uターンの後、休会状態であった郷土研究会(会費2,000円/年)を復活させ、年に1回の会報を発行しつづけてきた。会員は約30名。例会にはだいたい10名程度の出席であるという。冊子は、120から130部を印刷し、1冊1,000円で頒布もしている。月1回の例会やシンポジウムなどを企画する。広い意味での民俗文化の掘り起こしや記録として残すことを目指している。

K氏が中心になってまとめた最大とも言える事業は、島内に伝わる8月踊りをDVDとして記録したことである。

郷土研究会とは別に文化協会を母体とした「8月踊り映像制作委員会」(約12名)をたちあげ、公的な資金の補助を確保して、2007年と2008年の2年間で、島内33集落のうち22集落(他に以前に1集落分は作成し

ていたので、合計 23 集落分) の 8 月踊りを収録し、それを 1 集落 1 巻の DVD として完成させている。撮影・編集・渉外・パッケージデザインまですべて島にいる人材で分担してやりきった事業である。見方をかえれば、島内に、ホームビデオカメラや音響機器で文化を残す撮影・収録をしていた人材がいたということでもある。自前の伝承・創生の媒介活動といえよう。「喜界島の 8,000 人の中で、割と技術もった人間がいる」と氏自身も語っている。

この 8 月踊りの DVD の特筆すべき点は、3 人踊りというスタイルを考案していることである。通常舞踊の記録は、全体の遠景と近景で撮ることが多い。これに対して K 氏らが試みたのは、伝承の保存や復活のための資料という視点から、前・後・横の 3 人を同時に撮影するという技法である。これによって、踊りの型が明確になり、もし踊りの継承が途絶えた場合でも、映像をみて復活が可能となる。このスタイルを考案したのは、前述した I 氏である。

作業は以下のような行程をとって進められた。

- ・唄える人が 2~3 人、バックコーラスが 5~6 人
- ・ 8 月踊り唄を収録（この収録・編集・CD 化には、後述する YON グループが活躍）
- ・編集して CD を作成
- ・ 2~3 ヶ月の踊り練習
- ・カメラ班が撮影する

喜界島でも高齢化が進み、8 月踊り唄の担い手は 70 代や 80 代である。節回しや言葉がよく分からないということで、若い世代にはとっつきにくく、跡継ぎがない状態にある。各集落で、「最後に唄える人」が病気がちといったことが現実味を帯びるようになってきた。K 氏は、そうしたなかで、「(地元の人も) なんとかせないかんということは思っても、行動にできない。... (なんとかせという) 意識はあっても、行事として盛んに成り立っているのだから、危機感まではもっていない。」確かに、模範となる

人物が2~3人が踊り、子どもたちも参加して20~30人が踊る。そうした光景が続いていることもあり、「まだこんなに成り立っているじゃないか」という意識で終わっているのだという。

また、2012年には、大部の『8月踊りの歌詞集』を発売している。8月踊りの歌詞を、文字化するという作業は、偉業ともいべき作業であるが、それを1人の市井人が成し遂げたことは特記に値する。

もちろん、これまで集落の8月踊りは、それぞれの現場で、なんらかの形で文字化されていることが多かった。集落によっては、 magari なりにもガリ刷り歌詞集があったり、カセットテープがあったりしたという。しかし、それはそのままでは、散逸をまぬがられない。氏は、それらを集め、必要な収集も加えて、一つの出版物にまとめるという作業をなしとげたことになる。

また図書館にあった古くなったVHSの伝統芸能の記録をDVD化するなど、アーカイブスの重要性を意識している貴重な人材でもある。

さらに興味深いのは、8月踊り以外の「近代伝統芸能」という視点から、ある集落に伝わる多様な大衆芸能を記録に留める作業を試みていることである。演目は盆踊り、イトウ（仕事唄）、長刀踊り、そろばん踊り、忠臣蔵などである。

氏は、ある集落のそうした芸能を集めて、『近代伝統芸能』のDVDを



写真 8

K氏が手がけた文化伝承の「形」の一部

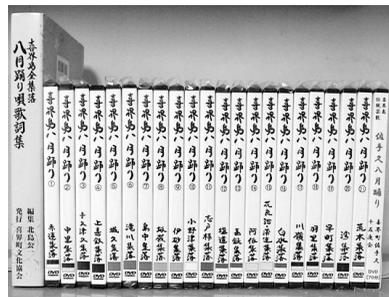


写真 9

DVDシリーズ

作成した。

こうした伝統の記録・保存活動では、最近ではデジタル機器の普及がこうした活動を可能にしている。氏自身そのことに自覚的である。

「文化の伝承保存でも、メディアがあったからやりやすくなった。素人でも割と簡単にできるようになった。」という。

K氏の事業のなかで、特筆すべきもうひとつの点は、「絶対（お金の）持ち出しはしない」という考えかただ。「多少プラスマイナス0くらいで」という。「ボランティアといって自分で持ち出すというのがあるけれど、1回目はいいが後が続かない」という。

## 視点2：担い手のキャリア

K氏もまた、Uターン組である。島出身。両親は教員だったために、小学校で喜界島を出ている。大島高校出身で、ラジオ喜界島のM氏とは、同級生にあたる。高校時代は文学青年であったという。氏は、関東で大手電機メーカーのコンピュータ関係のシステムエンジニアを長くつとめ、早期退職して島に帰ってきている。本宅は、関東にあり、島へは単身赴任である。2005年に親の介護のために島に帰郷している。

そのK氏が、喜界島の古い伝統芸能に目をやることになった転機は、Uターンしてからの島文化との出会いである。喜界島に帰ってきたら、「家の前が公民館で、おばちゃん、おねえさんが、毎月1回、わけのわからないことをトントンとやっている。」それを聞いたのがきっかけで、興味をもつようになったという。小学校で島を出た氏にとっては、文字通り未知の文化との遭遇であった。

氏には、島に兄弟はいないという。親戚が少なく、従兄弟があるが、そう親密というわけではない。こうした親戚のしがらみ、仕事のしがらみのなさが、いきなり帰省して大胆なプロジェクトを次々と展開できた理由でもある。

## 視点3：担い手の考え方

K氏の「なんとかせないかん」を行動に結びつけてきた起動因は、危機感であると思われる。

K氏は、以下のような事例を語りながら、島における危機感のなさを指摘する。島の高校を出て島外に出て行く。そして5年、10年を経て島にもどり島の男性と結婚する。島の外で面白いことを覚えると、島の文化に関心がなくなる。高校までは島にいたので、身体にしみこんでいるはずなのに、もどってきて島の文化の伝承には行動力が向かない。K氏は、島の文化の伝承が、高齢者と中高年の間で切れていることに危機感をいだく。そして、現在、祭りが持続していることからくる危機感の欠如、あるいは、行動力の欠如を指摘する。

集落固有の伝承は、集落が自給自足的に集落内で生活が完結していることからくる。よその集落に嫁に行っても馴染むのに苦労すると言われた。その意味では、空間的、地理的に孤立しているから固有の集落文化が生まれ維持されるのではなく、交流のなさの所以の孤立であって、今日の社会移動の激しい、交通の発達した社会では、そうしたかつての集落の固有性の維持自体が困難であることをK氏自身も自覚している。だからこそ、「記録に残す」ことに氏は、こだわる。集まって、一晩飲んで、一晩寝たら危機感を忘れるのではなく、また集まってただ望郷の念を共有するだけでなく、何かかたちにする行動力。氏のものの考え方は、そうした行動を起こすことへの強い志向を読み取ることができる。「いかんせん、皆さん、形にできていない。」と言う。

喜界島で数々の記録メディアづくりを展開したK氏であるが、「思ったほど広がらない、という思いがある」という。「よくできましたね。ほう」という感じで受け止められ、氏のような活動が島の文化保全運動としてはひろがらないのだという。郷土研究会も氏のリーダーシップが大きかったことを考えれば、こうした活動がどう後継されていくのか、課題を残しているとはいえる。

しかし、K氏の実践は、1人の実務能力ある文化メディエーターが  
いるだけで、「形に残す」行動が生まれることの好例であろう。この「形  
に残す」という方向性は、文化伝承と創生のあり方に貴重な示唆を与えて  
いるといえる。

#### (5) 古い島唄のアーカイブを担う YON プロジェクトと N 氏

前述した K 氏による 8 月踊りの保存事業を、音声の収録と編集の面で  
支えたのが、YON というグループである。喜界島の土産品店には、この  
グループが自主制作した喜界島の島唄の CD が販売されている。その中心  
人物の 1 人が N 氏である。

#### 視点 1：実践内容

喜界島の固有の島唄を収録し、それを CD としての残す事業を行った。  
また、各集落の 8 月踊りの音源づくりを担当した。グループ 3 人の頭文字  
から、YON という名前となっている。

YON のグループが最初に手がけたのは、古いテープ、古い 8 ミリとか、  
そうした古いものをともかく集めデータに保存しようという活動であった。

島唄の保存は、島内の三味線（三線）の名手から、「島唄を残してくれ  
と頼まれた」ことがきっかけだという。その三味線の名手 T 氏が語った  
のは、「島でいま伝承している歌い方は、（ここで昔から唄われてきた）島  
唄ではない。昔はこんな歌い方をしていない。それを今、残しておかない  
となくなってしまう。」という思いからの依頼だった。T 氏によれば、「島  
唄なんかは、みんなで唄うものであって、あんな賞など取るもんじゃない。  
ステージなんかするもんじゃない。」という。

そこでメンバーは、ミキサーやパソコンを集落に運んでは、マイクで収  
録する、という作業を繰り返した。ファイル形式 wave で、パソコンに直  
に収録したという。その三味線の名手 T 氏はすでに他界しておられるが、  
N 氏によれば、「あの人の三味線が一番上手いと思う」と評価する。島唄

は、通常唄がメインで三味線が伴奏ということが多いが、YONの録音では、歌い手2人、三味線1人の構成に対して、あえて三味線の音を大きく、強く入れるかたちで収録したという。第1作品は、2007年に完成している。島唄CDの制作は、自分の三味線を残した、自分たちの唄を残したいというグループと、それを録音・保存したいというYONのグループとの関心が一致して生まれたプロジェクトであった。

K氏の8月踊りの録音も、その半分をYONグループが担当している。録音には、集落の集会所を使うことが多いが、場所の制約に伴う困難や、太鼓の音量の問題など苦勞を重ねながらの収録であったという。

## 視点2：担い手のキャリア

N氏は、両親ともに喜界島出身で、教師であった。1946年（昭和21年）に生まれて小学校の4年まで島で育ち、その後転勤に伴い鹿児島県内の各地を移動している。京都の大学に進み、京都で仕事をしていたが、約30年あまり前の1982年（昭和57年）、40代半ばで帰省し、現在は、船を所有して漁師をしている。

ウィンドウズがでる時期の1994年くらいからパソコンを操作するようになったという。

N氏自身が島のことをよく知らないという。そのことが、「あの時代どんな時代だったのかな？」という問いへとつながり、自分が見るため、聴くために、その時の写真や音源への興味・収集へとつながっていった。オープンリールデッキもそのために購入している。もともと理系の人間で、パソコンなどを触るのは好きだったのだという。



写真 10

YONグループが制作した喜界島の島唄CD

### 視点3：担い手の考え方

すでに触れたように、自分が小さなころの島はどんな時代だったのだろう。そうしたことへの関心がN氏を突き動かしてきたといえる。

氏は、島にもどって、「小さな頃の機織りの音を懐かしく感じる。あ～島唄いいなあと再認識した」という。そしてある教室の島唄を聴いたときに、「あれっ、ちょっと違うな」という違和感をもった。自分の記憶の中の島唄とは違う。そして、島の唄者の島唄を聴いたときに、「あ～、これなんだ」と思ったという。ニュアンス、イントネーション、唄い方が違うのだという。そうした体験をきっかけに、「喜界島の言葉で唄っている唄を残していこう」と、アーカイブスのプロジェクトを始めたのだという。

## 4 地域メディアから文化メディアへ

本稿では、喜界島で文化を媒介する活動を実践する5人の担い手（文化メディエーター）を紹介してきた。島唄が盛んな島という実績をつくりあげたY教室のY夫妻、特定の集落の文化伝播に心血を注ぐI氏、島のうた文化をネットで発信するラジオ喜界島を運営するM氏、郷土研究会を母体にしながら島の文化をメディア媒体として次々に保存発信していくK氏、音声のメディアアーカイブを手がけるYONの活動を担うN氏である。

従来の地域メディア論の視野では、喜界島には地域メディアはないことになる。いや、インターネットラジオとして「ラジオ喜界島」と、空間メディアとしてライブハウス「SABANI」が列挙されるかもしれない。

しかし、文化メディア学 文化メディエーター という視点をもつことによって、本稿で紹介したような喜界島におけるさまざまなメディアプロジェクトを、メディア学にとっての意義のある実践として位置づけることができると思われる。

本稿で紹介したこれらの 文化メディエーター には、強いミッション

がある。M 氏、I 氏、K 氏、N 氏の事例から浮かび上がる担い手像は以下の通りである。

島の外に出た経験

島の文化への再覚醒

島の文化の伝播（伝承・創生）への強いミッション

文化媒介活動を支える知的な資質

経済的な生活基盤（勤め・自営・年金など）

ずっと島にいた人でなく、Uターンや外からの移住であるからこそ、喜界島の文化の意義への再覚醒があり、自らの少年期や出自への確認も含めてアイデンティティ形成としての文化媒介実践があるともいえる。

もちろん、喜界島の文化メディエーターはこの5人の担い手に尽きるものではない。

島の固有の島唄を教室として実践している方もおられる（今回の調査取材ではインタビューすることができなかった）。また、Y教室から育ち、島の観光大使として島唄や島の情報発信に駆け回っている唄者もいる。島初のライブハウスを立ち上げ、島のミュージシャンを育て、またエイサーを盛んにしようと試みている担い手もいる。また島外にあって、島に関する論考や資料をまとめた同人誌『榕樹（がじゅまる）』（2013年3月に29号を発刊）を年に1回発刊し続けているグループもある。その一部は、インターネットでも公開されている。

また、調査取材では、あえて公的なセクターの担い手にインタビューすることをしていない。喜界島の公的なセクターにも、喜界島の文化の伝播や情報発信に取り組む担い手たちがいることは間違いない。ただ、筆者らのこれまでの調査研究は、極力、行政との関わり避けてきた。行政関係者の説明フレームから地域を見ることを、意図的に、方法的に避けているからである。

今回紹介した喜界島の文化メディエーターは、ある意味では研究者や行政もなしえない優れた文化伝播の偉業を、地域のなかで、地域の資源

を動員することで実践してきた方々である。

喜界島への調査取材を通じて、とりわけ印象に残るのは、K氏が語った、「なんとかしなければいけないという思いはみんなもっている。でも、飲んで語って、その場で終わって、次の日に忘れてしまっていてはダメなんだ。それを、『形』にすること、『形として残すこと』が大切なんだ。」といった発話である。

もちろん文化メディア学の視野からは、「形」を残した活動だけが評価されるということではない。しかし、「形」は「メディア」ということでもある。K氏の発話は、「メディア」という「形」を創作する活動実践の重要性の指摘でもあるだろう。そうした「メディアづくり」という「形」をつくる実践だからこそ、具体的に人材・物・資金のネットワークを形成してアウトプットを出すことができる。K氏は、そのメディエーション活動自体は、コンピュータSE時代の工程管理と基本は変わらないという。そこには高度に近代化された知性の発動があることも事実である。

島の固有の文化資源と、島と濃度の高いコンテクストを形成する人の知力とミッションが交叉する時、島における文化メディエーターの実践が花開くといえるのかもしれない。

#### 注

- 1 詳しくは、加藤・寺岡の先行研究を参照いただきたい。
- 2 筆者らのこれまでの調査は以下の3度である。  
2009年夏 喜界島ラジオ、ライブハウス SABANI 取材  
2011年夏 喜界島ラジオ、YON プロジェクト、郷土研究会取材  
2012年夏 Y 民謡教室、YON プロジェクト、郷土研究会、奄美民謡優勝者取材
- 3 図1の概念枠組みについては、これまで「地域メディアプロジェクト」と呼称してきたが、研究の進展、さらに本稿の対象説明との親和性を考え、「文化メディアプロジェクト」と呼称した。
- 4 もちろん氏以外にも、喜界島には、シマに準拠した島唄を伝承・媒介し続けている方が島唄の教室を開いているS氏のような方もいる。喜界島の古い島唄を知る第1人者と言われている。筆者らは、まだ取材をすることができなかつ

たので、本稿では紹介を割愛する。

#### 参考文献

- 加藤清明・寺岡伸悟 (2010) 「メディアとパトリの島・奄美 - 地域からの情報発信とその文化的苗床との連環を焦点にして - 」 『中京大学現代社会学部紀要』第4巻第1号, pp. 81-139.
- 加藤清明・寺岡伸悟 (2012a) 「奄美における地域メディア研究のための予備考察 - 文化・メディア・ローカルアイデンティティ - 」 『中京大学現代社会学部紀要』第6巻第1号, pp. 77-110.
- 加藤清明・寺岡伸悟 (2012b) 「奄美のうた文化と文化変容論・序説 - 地域メディア論と文化メディア学的視座 - 」 『中京大学現代社会学部紀要』第6巻第1号
- 姫田忠義 (1991) 『忘れられた日本の文化 - とり続けて三〇年 - 』 岩波書店
- 田村紀雄・白水繁彦編著 (2007) 『現代地域メディア論』 日本評論社